

小田切車体を支える社長と職人たち。
日本各地で活躍するトラックの荷台を少数精鋭で
作り上げている。



他にはない製品づくりにこだわり、 お客様の要望を最大限に叶える

「他にはない素材」「他にはない技術」を駆使して作り上げられた小田切車体のトラックの荷台。常識を覆すその製品たちは秋田県内にとどまらず、日本各地の企業から注目を集める。小田切勝実社長の「ものづくり」への情熱と職人たちの確かな技術によって、小田切車体は成長を続けている。



代表取締役社長
小田切 勝実
Katsumi Odagiri

馬車やそりから、トラックの荷台へ

小田切車体の始まりは、戦後間もない、まだ車がない中に普及していなかった時代に遡る。創業者は現社長の父。当初は農業や林業、畜産業を営む個人向けに、馬車やそりの製造を行っていた。その後、自動車の普及とともに、業務はオート三輪やトラックの荷台の修理、フレームの修理などへと移行。昭和40年代から、新車トラックの荷台の製造・取り付けが事業の中心となる。平成元年に有限会社化。5年前に小田切勝実氏が社長を引き継いだ。

勝実社長が小田切車体で働き始めたのは26歳のとき。それまでは航空機や特装車両などを製造する大手機械メーカーに勤めていた。大型トラックのキャビンの製造ラインを管理する部署に配属され、機械加工は

もとより、油圧機構や電気系統に関する設計から生産技術まで、現在の小田切車体を支える多くの知識を習得した。

ユーザーのニーズに応えた 荷台の開発

現在、小田切車体の業務の大半を占めるのが、大型トラックの荷台を製造・改造する、荷台架装だ。これまでに製造した荷台は、重機運搬車、原木運搬車、鶏運搬車、タイヤ運搬車、ステージカー、冷蔵庫付きキッチンカー…と多種多様。どんなお客様のどのような仕事に使えるかによって、トラックの荷台に求められる機能や要件は異なる。実際にユーザーの話をよく聞き、細かなニーズに応える必要がある。

例えば、原木運搬車の場合、原木を積み込むために山道に入ると、車高の低いリヤバンパーは破損してし

まうことが多い。一方で、大型トラックはリヤバンパーに車などが追突した場合のもぐり込みを防止する機構の装着が義務付けられており、無断で構造の変更ができない。そこで、小田切車体ではリヤバンパーを上下に可動させる装置を開発し、特許を取得した。

また、養鶏業者からの要望に応じて製作した、鶏の入ったかごをトラックの荷台に積み込む装置、「チキンリフター」でも特許を取得している。これまで、養鶏場から出荷する鶏をトラックの荷台へ積み込む作業はすべて手作業で一晩中かかっていたが、「チキンリフター」の導入によって、養鶏業者は重労働から解放され、作業時間も大幅に短縮された。現在は県内や岩手県の養鶏業者が主なユーザーだが、この評判が業界で広がり、遠くは九州の養鶏業者からも引き合いが来ている。

他にはない製品の開発を目指して

小田切車体の成長の契機となったのは、荷台への「スウェーデン鋼」の採用だ。スウェーデン鋼は北欧の良質な原鉱石から作られる極めて高硬度な鋼材で、そのタフな性能から、採鉱や採掘などの過酷な環境で使用される大型重機に用いられている。「これをトラックの荷台に使えないだろうか？」と小田切社長が思いついたのは25年前。硬くて薄い鋼材で荷台を作れば車体重量を軽くできる、その分だけ最大積載量を増やすことができると考え、すぐに材料を取り寄せて試作に挑戦した。切削加工や熱処理、溶接など、いくつもの技術課題に直面するも、試行錯誤を繰り返した末に製品化に成功。現在ではこの鋼材を扱った先駆けとして県外から注目され、「最大積載量を確保できる荷台」への受注が増加している。同時に、高速道路での自動重量測定器による過積載への取り締まりが厳しくなっていることや運輸事業者の安全運行意識の高まり等により、「荷台の軽量化のニーズは今後ますます増えていくだろう」と小田切社長。お客様のために「もっと強く、もっと軽く」を追い求めるその目は意欲に溢れている。

「他とは違うこと」「誰もやったことがないこと」に挑戦し続けてきた小田切車体。その原動力となるのは、社長の少年のような好奇心だ。横浜での展示会「ジャパントラックショー」やドイツでの「IAA国際商用車ショー」に足を運び、常に海外メーカーのアイデアから刺激を受けている。「ものを作ったり考えたりするのが好きだし、楽しい」と、使い込まれた製図用ドラフターの前に座って少しはにかむ。続けて、自分の若かりし頃にいくつもの失敗を経験してきたことを挙げながら、「今の若い人たちは失敗を恐れずに、いろんなことに挑戦してほしい」と語る。

「楽しんでものづくりに向き合う」、小田切車体のものづくりの源泉はそこにある。社長の想いとそれに呼応する職人たちの技術。昨日までの小田切車体にはない技術を明日に求めていく。



- A 品質を支える確かな溶接技術
- B 上下に可動するリヤバンパー
- C 「チキンリフター」搭載の鶏運搬車
- D 荷台にスウェーデン鋼を使った原木運搬車



有限会社 小田切車体

〒017-0877 秋田県大館市立花字山田渡196番地
TEL.0186-42-6222 FAX.0186-43-0530
E-mail os_truck@ybb.ne.jp
URL http://odagiri-truck.jp

- 創業/平成元年
- 資本金/1,000万円
- 従業員数/17人
- 営業品目/製造業 トラック荷台架装及び修理